

子どもたちの顔を一人ひとり、  
一日の、ほんのわずかな時間でいいから、  
心を込めて見つめてやろう。

I

良い  
父親  
って何だろう

男は順調な人生を歩んできた。だが、ある日のこと、途方に暮れている自分に気がついた。こんな状態が、ここしばらく続いている。いままで気にもしなかったのだが、いったいこれはどうしたことだ。すぐになんとかしなければ。と男は思いをめぐらせた。

ことの起こりは、妻が突然死んだ頃にさかのぼる。五人の子どもが遺されたのである。彼も妻も、わが子をこよなく愛していたし、きびしく育てようとしてきた。基本的には、自分たちの両親がしてくれたとおり子育てをしてきた。

もっともこの男には、息つく暇もない子育ての苦労など、ほんとうにはわかっていなかった。そのぶん、妻がどれほど大きな責任を負わされていたのかも。

妻がやっきになって伝えようとしていたのは、このことだったのかと、ようやく気づきはじめてのだった。

子どもたちと過ごす時間が多くなればなるほど、いままで自分がいかに何も知らなかったかがいやというほどわかった。妻がしばしば、子どもたちがだんだん悪くなつていくように気が滅入ると訴えていたのを思いだした。だが彼は、一度だつてとりあおうとしたことなどなかったのである。

子育てがいかに骨の折れるものだったが、いまになってやっとわかってきた。助け合つて子どもを育てていたら、もっとうまくいったらうにと悔やまれた。

しかも、子どもたちの行動は、母親のなだめや保護がなくなったことであらわになった。彼は子どもたちのありのままの姿を見るようになった。

夫が子どものまぢがった行動でわずらわされないようにと、妻がどれほど気を配つてくれていたかを考えた。それとも妻は、子どもたちをかばっていたのだろうか、父親である自分にわずらわされないように。

自分の目でよく見れば見るほど、子どもたちがいかに始末に負えないか、いつそう身にしみてわかつてきた。父親や母親にもらったことを、いつこうにありがたがつているようにも見えない。それにしても、いったい彼らのまなざしのなかにあるのは何なのだろうか。戸惑いや混乱なのだろうか。

家庭をもつたのが、普通の人より遅かったことはわかっている。仕事に追われていたせいだ。それにしても、自分は子どもたちの世代とそれほどかけ離れた存在なのだろうか。

世間の子どもたちは、みんながこんなふうなのだろうか。自分の子どもはいつから、どうして、こんなふうになってしまったのだろうか。

時がたつにつれて、家庭のなかに深刻な問題が芽生えはじめていることに気づいた。それまでは、このような問題は新聞が何かで目にしてもわが家には無縁のことだと思っていたのだ。

はじめて、テレビや新聞のニュースに不安を感じるようになった。青少年の麻薬使用、破壊的行為、違法行為や婚外出産、非行、さらには暴力的犯罪や自殺。日々、どこかで起こっていることだし、しかも、ふえつづけている。現実はそのとおりなのだが、考えたくなかった。あまりにも心を乱されるからだ。

彼は、こういつたことのいつさいを、心のなかから締めだそうとした。ところが、子どもが帰宅が少し遅くなったり、その回数が多くなったりすると、そういうえば青少年の家出がふえているんだなどと、つい考えてしまうのだった。

人間味を感じさせない統計のおかげで、人間としての苦痛を体験している家族がいたると

ころにいるという事実を、ともかく実感しないではいられなくなった。

彼はわが子を愛していた。

何か手を打たなければならぬと腹を決めた。

だが、どうすればいいのか？ 何からはじめればいいのか？

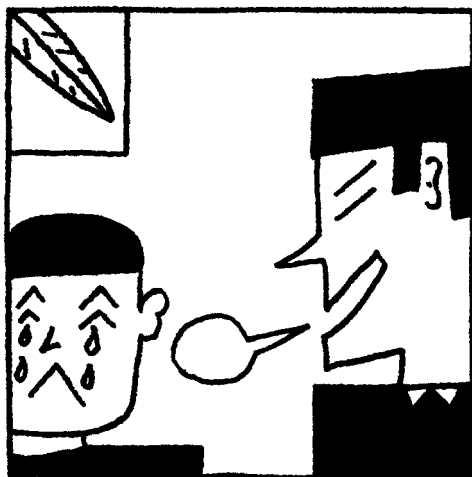
これまで、そういうことを考えたこともなかった彼が、いまや目を開いて家族を見つめている。なんとしてでも、解決策を見つけてなければならぬ。

『私は、子どもに責任を取らせたことが一度もなかった。彼らはずいぶん勝手放題をやっている。こんなことでは、子どもたちのためにも、私のためにもよくない』

『子どもたちにはもつときびしいし、つけが必要だ』と彼は考えた。まさしく、そのとおり、たしかに彼の子どもにはもつときびしいし、つけが必要なのだ。そこで、彼は一段ときびしく、知る限りの最善の方法でしつけはじめた。

手はじめに、自分が両親から受けたしつけよりもきびしいしつけを施した。子どもがいけない行いをする時、子どもを突き倒したり、脅かしたり、子ども部屋に閉じ込めたり、それまで許していたことを禁止したり、お尻を叩いたりした。

だが、期待したような結果は得られなかった。



そこで、方針は変えないで、さらにきびしくした。それで疲れ切ってしまったが、子どもたちの行いは一時的には良くなった。だが、心がけはいっこうに良くならない。表向きはかなり素直になったが、腹の底ではますます反抗的になっていた。

家庭のなかには緊張感がみなぎり、彼のいらだちもつのる一方だ。懸命にやればやるほど状況は悪くなるようだった。

さすがの彼も、どうしたらいいのか、わからなくなった。だが、子育て以外のことでなら、こんな状況に置かれた経験は何度かあり、そのたびに、いつもまい解答を見いだしていた。そこで、今回もその方法を試みることにした。

答えを知っている人を探すことにしたのである。



◆……一分間で叱る

初対面の挨拶をする男に、医師はコーヒーをすすめた。男は話しはじめる。

「なぜ家族を思うように動かせないのか、どうしてもわからないんです。ほかのことなら、たいていうまくいつているんですが……」

家族行動についての専門家であるその精神科医は、「あなたのお気持ちはよくわかります」といった。

そして、静かな声でこうたずねた。「なぜ、ご家族を自分の思うとおりに動かさなければならぬと考えるのですか？」

男はひと息ついて、医師の言葉に耳を傾けた。そんなことはいままで考えたこともなか

つたし、それは親である自分の当然の責任だと思ひ込んでいたのだ。話を聞くうちに、とくに自問自答していくうちに、しだいに事態がはつきりしてきはじめた。

医師はさらにたずねた。「お子さんたちの生活を、あなたの思いどおりに動かしていくのと、お子さんたちに自分自身の生活をつまく取り仕切らせるのと、あなたにとってどちらが負担が軽いと思いますか？」

「そうですね、自分にとつて何が正しいかを思慮分別をもつて自ら判断できるような子どもになってくれたらと思ひますね。世間の親が願うのと同じです。子どもたちには幸せになつてもらいたいし、こういう人になりたいと彼ら自身が思つような人間になつてもらいたいですね」

医師は質問をつづけた。「いまいちばん大きな問題は何ですか？」

「し、つけです。私の思いどおりにふるまわせることすらできないありさまですからね、幸せになつてほしいなんてことはおこがましくつて」

「あなたの思つようにふるまわせる、とおっしゃるんですか？」

「わかりました、わかりました。子ども自身のために、です」男は、一本とられて降参だというように両手を挙げた。